Bellmark Shimbun

ベルマーク新聞 6月号

発行　公益財団法人 ベルマーク教育助成財団　東京都中央区築地5-4-18　汐留イーストサイドビル7階　〒104-0045　電話 03-5148-7255（代表）　郵便振替口座 00100-7-56035
大阪事務所　大阪市北区中之島2-3-18　朝日新聞大阪本社内　〒530-8211　電話 06-6231-0131　ダイヤルイン 06-6201-8031　ホームページ http://www.bellmark.or.jp/

運動説明会、全国で花盛り

5月8日に新宿・広島・福岡で始まったベルマーク運動の2018年度説明会。6月10日までに全国72カ所で開催しました。どの地域でも真剣に説明に聴き入る来場者の姿が目立ち、時には体験発表校に対して多くの質問が出た会場もありました。お越し頂いた方々には、この場を借りて深く御礼申し上げます。

説明会冒頭で上映しているDVDはお貸しできます。返信用封筒付きでお送りしますので、費用はかかりません。どうかご利用ください。他に説明会の後で気付いた疑問などありましたら、何でもお気軽に財団にお問い合わせください。

財団では6月下旬にかけて、さらに23カ所で説明会を開催します。これからの地域の方、長くお待たせしてしまって申し訳ありません。間もなくうかがいますので、その節はどうかよろしくお願いいたします。

友愛援助、今年も10事業で募集

紛争や貧困、自然災害など苦しい状況の中で教育を受けられなかったり、苦しんでいる子どもたちが大勢います。世界の子どもたちのために何か支援できることはないだろうか。みなさまの声に応えてつくられたのが、ベルマーク運動の友愛援助です。自分たちの備品購入をちょっと控え、ベルマーク預金を直接寄付にあてる仕組みで、1998年にスタートしました。

2018年度は、引き続き東日本大震災で被災した子どもたちへの支援をはじめ、10事業を募集します。海外の対象国は、アフガニスタン、ラオス、タイ、東ティモール、ミャンマー、マダガスカル、ブルキナファソ、イラクの8か国です。対象事業はベルマーク財団が審査して選びました。東日本大震災援助は財団が直接、他は事業実績のある団体が行います。

金額は問わず、複数の事業へのエントリーも大歓迎です。世界の子どもたちのため、ふるってご参加ください。詳細は財団HPの「ダウンロード」→「各種申込書」から、友愛援助事業の項目をご参照ください。

Instagramはじめました

インスタグラムにベルマーク教育助成財団の公式アカウントを開設しました。財団の公式キャラクター「ベルマーくん」は、最初にお風呂に入って気合を入れた後、各地の運動説明会を渡り歩き、ベルマークの魅力を知ってもらうべく奮闘中です。様々な情報を不定期で発信しますので、コメントもお待ちしています。また、ハッシュタグ「#ベルマーク」を付けたみなさまの投稿も拝見したいので、こちらもよろしくおねがいいたします。

ベルマーク運動説明会、旅ドキュメント

山形→福島→仙台→盛岡

山形／5月15日（火）

財団の決算理事会を終えた後、東京駅から午後５時発の山形新幹線に飛び乗る。車窓からは水を張った田に沈む夕陽が美しい。福島から奥羽本線に入る頃はすっかり暗くなり、夜８時まえ、山形に到着。会場下見は先乗りした同僚が済ませていた。

翌朝、会場の山形テレサへ。体験発表していただくのは、山形市立西小学校の平成29年度PTA会長、井上和行さんと、30年度会長の髙田厚さん。開場前に打ち合わせをしているうち、協賛会社として来場したジブラルタ生命の担当者のお子さんも偶然、同校の児童だと判明。会話が弾み、なごやかな雰囲気に。

西小の井上さんの発表は、保護者の負担軽減のためベルマーク整理日を年６回から３回に半減したが、一方で、実際に物品を購入するなどして目的意識を持って活動することを心がけたこともあり、前年比86%の約４万点を集めることができた、という内容。用意した原稿に目を落とすこともなく、流暢に語りかける井上さん。来場者からは細かな点についての質問も寄せられていた。

来場者のうち２人は福島からわざわざ車で来たそう。福島の説明会は翌日だが、市の鼓笛パレードと重なるため、一日早い山形に来たとのこと。その熱意に頭が下がる思いだった。

福島／5月16日（水）

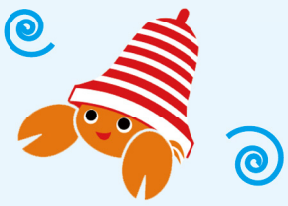
山形から新緑の中を抜けて福島へ。駅では、ご当地のゆるキャラ、キビタンが出迎えてくれた。

会場のコラッセふくしまの下見で、案内してくれた担当者としばし雑談。東日本大震災の影響は、福島市内では表面的にはおさまっているように見え、駅前の放射線量計に関心を寄せる人ももういない。でも実は心の奥底の部分で、主に人間関係の問題で様々な思いがくすぶっている、という話を聞く。被害の根の深さを改めて思い知る。

翌朝、福島の気温予想が日本で一番高いという猛暑の予報。鼓笛パレードとのバッティングもあり、参加者数を心配したが、結果は昨年と同じく26校が参加、計53人が訪れてくれた。ただ参加者に聞くと、パレードに行くため欠席した人も多かったようだ。

体験発表は、福島市立森合小学校の29年度PTA会長、二階堂義樹さん。児童が700人近く、クラス数も26ある大規模校。保護者全員参加がPTAの約束になっており、ベルマークも毎月100人ほどが作業をしているという。仕分けにはイチゴの空パックなどを使っているそうで、さすが果物大国・福島ならでは。同じくPTAの鈴木朋江さん、八島小百合さんが、実際の道具を手に、発表をサポートしてていた。

ベルマーク財団の職員は毎年5、6月、説明会のため全国を飛び回ります。移動して会場に着いたらを下見して現地泊。翌日午前に説明会を開き、終えるとまた移動……。月曜に東京を出発し、金曜に戻るまでに4会場で開催します。このうち、5月に東北4県を回った職員が、見聞きした各地の様子を綴ります。



仙台／5月17日（木）

仙台といえば伊達政宗。会場下見の後に仙台城址を訪れ、有名な騎馬像を見に行く。でも、お顔の後ろに午後の太陽が入ってしまい、完全な逆光。露出を大幅に補正して撮影する。

当日、会場のトークネットホールには300人近くが来場した。協賛会社のブースも５社あって、ロビーはにぎやかな雰囲気に。ただ、朝からの雨のため出足が遅かったのか、定刻の10時になっても入場者の列が続く。やむなく開会を５分遅らせた。

発表者は仙台市立北六番丁小学校の小山由紀乃さんと渡辺由香さん。小山さんが作ったパワーポイントは、冒頭、宇宙から見た地球がどんどんズームアップされていき、日本列島、そして仙台、最後は学校の位置が示される、という映像。思わず会場からもどよめきが漏れた。パワポの技は最近習得したばかりとのことだったが、他にもアニメ効果を使うなど、工夫を凝らした見事な出来栄え。実際の活動でも、マークを切り揃えることをやめたり、マークのサイズに合わせて4種類の台紙を作るなど、随所に合理化や工夫がみられた。

発表が終わった頃には雨は上がっていた。仙台はこの週末「仙台青葉まつり」を控えており、アーケードのあちこちに大きな山鉾が置かれていた。

盛岡／5月18日（金）

名峰・岩手山の姿を楽しみに盛岡入りしたが、あいにく厚い雲に覆われていた。天気は下り坂との予報。その通り、発表会当日は雨になった。

盛岡駅前にあるアイーナ・いわて県民交流センターは、図書館やホール、会議室など様々な機能を備えた複合施設。中には大きな吹き抜けがあり、ガラス張りのエレベーターに乗ると、木を象ったオブジェ「エレクトリック・ツリー」を見下ろすことができる。その最上階、8階の会議室が説明会の会場だ。

発表校は盛岡市立仙北小学校。村田浩隆副校長が、PTAの阿部ひとみさん、谷藤徹子さん、吉田真紀子さんとともに、念入りに原稿をチェックする。同校は児童718人、26学級の大規模校だが、さらに近隣のスーパーに回収箱を置くなど熱心に活動した結果、昨年度は目標の10万点を上回る13万点余を獲得した。

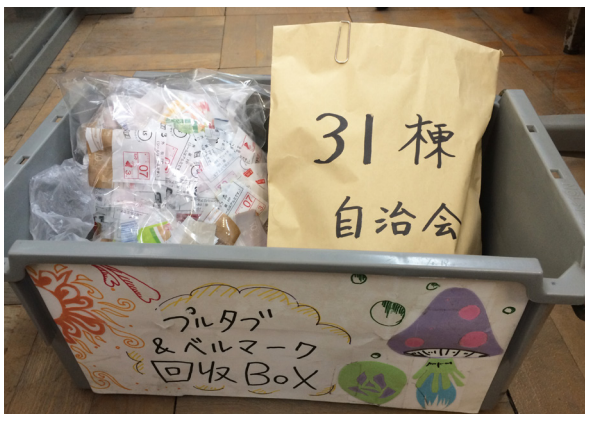
説明会の最後、ウエブベルマーク協会の今宿裕昭常務理事による、ネットショッピングでベルマーク点数を貯める仕組みの紹介が大いに関心を集めた。発表者だった村田副校長も真剣に聴き入り、「今度はウエブで１位をめざす」と、意欲を新たにしていた。

山形→福島→仙台→盛岡の説明会ツアーはこれで終了。雨脚が強くなる中、新幹線で帰京した。

生徒会主導で10万点集め、大型時計購入

大阪・南港南中、テーマソングにベルダンスも

ベルマーク集めに取り組んだ昨年度の後期生徒会の役員らと沖教諭（右端）。手にしているのが、購入した時計と公式キャラ「あけみ」ちゃんです



（写真上）マークの仕分け・集計に取り組む生徒ら
（写真下）地域からもたくさんのマークが寄せられました

大阪市住之江区の市立南港南中学校（高島裕二校長）の生徒らが、今春の小中一貫校化を記念して、約1年間ベルマーク集めに取り組みました。目標は10万点。生徒数約120人の小規模校としてはかなりのハードルの高さでしたが、地域や小学校を巻き込みつつ、キャラクター、テーマソング、ダンスなども創作して運動を盛り上げ、ほぼ達成。「一貫校のシンボルになるものを」と大型の電波時計を購入し、新校舎の壁に取り付けました。

中心になったのは生徒会です。一昨年末、担当の沖正樹教諭（30）の提案で、4人の役員が「みんなで目標をもって取り組めることをしよう」と、長い間休眠状態だったベルマーク運動の再開を決めました。楽しく続けられるようにして生徒の参加意識を高めようと、アイデアを出し合いました。

まず、公式キャラクターとマスコットの制作にとりかかりました。美術部員に頼んで、ベルマークとハリネズミをあしらった女の子の人形を制作。全校生徒から名前を公募し、女の子は「あけみ」、ハリネズミは「ミスター・トゲマウス」と名付けました。

さらにテーマソング「お隣さんはAKEMI」を作ります。クラスや各委員会の代表者らで構成する生徒議会のメンバーが作詞して、音楽が専門の沖教諭が作曲。タイトルは校内で募りました。

僕たちは集め続ける叫び続ける『ベルマーク回収～！』／僕たちは集め続ける叫び続ける／みんな知らずに　実は捨てている　いつも気づかない　ひと手間かけて／ベルベルベルベルベルマーク　チョキチョキ切り取り南中へ（繰り返し）／I want to ベルマーク　You have a ベルマーク（繰り返し）

一度聴いただけで、歌詞が頭の中に響き渡り、口ずさみたくなる軽快な歌です。吹奏楽部員らによる伴奏も付け、体育科の先生に頼んで、曲に合わせた「ベルダンス」も作り上げました。

そして、この年の4月、全校集会でお披露目し、ベルマーク集めを本格的にスタートさせました。毎週水曜と金曜の朝には、あいさつ運動も兼ねて生徒会役員らが、あけみちゃん人形とともに校門に立ち、マーク回収を呼びかけました。「ベルマークデー」を毎月設けて校内で回収し、仕分けと集計は全校生徒で分担しました。

地域への働きかけにも力を入れました。校区内の団地のあちこちに回収箱を置き、近隣の2小学校にもマーク収集の協力をあおぎました。

もともとあった1万点ほどのベルマーク預金も合わせ、積み上げた点数は9万1143点。卒業生などからの寄付を加え、時計の購入・設置が実現しました。

今年3月まで後期生徒会の会長を務めた草場琉太さん（3年）は「最初は集められるか自信がなかった。学校のみんなでやり切ったのはとてもいい経験になりました」と振り返ります。同じく副会長だった渋川陽生（ひなせ）さん（同）も「仕分けは大変だったけれど、目標を決めた以上はあきらめずに頑張ろうと思いました。マークが集まった時はうれしかった」。

沖教諭は「生徒会のやりがい、活性化につながれば」との思いでベルマーク回収を提案したそうです。運動部員らにも呼びかけ、「ベルダンス」のプロモーションビデオ（PV）を自ら制作するなど、生徒らの活動を応援し続けました。「無謀な目標だったかもしれません。でも、子どもたちは一生懸命取り組みました。地域や小学校からの支援も大きかった」と言います。「多くの人たちの協力を得て新しいことに挑戦した貴重な経験を、これからに生かしてほしい」と願っています。

「食」を通して地域の居場所を

キユーピーみらいたまご財団が「サミット」

一般財団法人キユーピーみらいたまご財団が「第2回地域の居場所づくりサミット」を5月30日に開きました。同財団は、「食育」を通して社会貢献をしている非営利団体を支援するため、協賛会社のキユーピー（ベルマーク番号07）が昨年4月に設立。「食育活動」と「食を通した居場所づくり支援」の2つの分野での活動を助成しています。

サミットでは、昨年度助成を受けた団体からの発表がありました。8団体が助成を受けた「食育活動」では、特定非営利活動法人森のライフスタイル研究所の代表理事長、竹垣英信さんが代表として登壇。同研究所は経済的な理由からイベントに参加する機会を得づらい母子家庭を対象に、畑づくりから始まり、栽培・収穫・調理・共食までの一連の流れを体験活動として提供しています。会場のスクリーンには親子で農作業をする様子が次々と映し出され、竹垣さんは「以前こども食堂に行ったときに、食べ残しをするお子さんが多かったのがショックだった。今回は食べ残しがなく、食を大切にするという心が養われたのではないか」と成果をまとめました。

12団体が助成を受けた「食を通した居場所づくり支援」の発表者は、一般社団法人寺子屋いづみ代表の岩岡いづみさんです。運営する「子ども食堂」に助成金で新しい台所を設置しました。1983年から「学習塾寺子屋」として学習する場所の提供もしていますが、その頃から一緒に食べることを大切にしているそうです。岩岡さんは「食べることは人と人との距離を縮め、食べながらだと心が緩み、自分の体験を話し始める」と、その重要性を語りました。熱気に満ちた活動報告会となり、大きな拍手で締めくくられました。

キユーピーみらいたまご財団は、今年度も食育活動で10団体、食を通した居場所づくり支援で16団体を支援しています。2019年度の助成対象は、今年の10月頃から募集開始する予定で、詳細は後日財団のホームページに掲載されます。

読んでみたい本　児童文学評論家・藤田のぼる

絵　本

『とびますよ』
（内田麟太郎・文、にしむらあつこ・絵、アリス館）

「とびますよ　とびますよ　ほらほら　そらを　とびますよ」と、まるで呪文のような軽快な言葉で始まる、この絵本。小鳥が空を飛び回るのを、ぶたがうらやましそうに見上げています。こうなれば、次のページでは、もちろん……。こうして、ことばと絵に誘われるように、いろんなものが飛び上がります。次になにが飛んで、それからどうなるのか。ページをめくるごとにドキドキできる、絵本の醍醐味満点の一冊です。（低学年から、1300円＋税）

『めしくわぬにょうぼう』
（常光徹・文、飯野和好・絵、童心社）

飯をくわない女房ならほしい、と思うけちでよくばりな男のもとに、「飯はいらないから家においてくれ」とやってきた美しい娘。確かに一口も食べませんが、なぜか家の米が減っていきます。不審に思い、仕事に出るふりをしてそっとのぞいてみると……。おなじみの民話が、飯野和好さんの絵で新たな命を吹き込まれました。怖い、おもしろい、おかしい、怖い……。5月の節句の由来話という結末ですが、そうした枠組みを越えて、読む者のさまざまな感情をひきださずにはおかない、存在感抜群の絵本です。（低・中学年から、1300円＋税）

『とってもなまえのおおいネコ』
（ケイティ・ハーネット作、松川真弓・訳、評論社）

はなさき通りの家々を渡り歩く1ぴきのネコ。グリーンさん宅ではアーチーと呼ばれ朝ごはんをもらい、ホスキンズ夫妻の家ではオリバーと呼ばれ、お茶をいただく。家ごとにいろんなことをして、いろんな名前で呼ばれます。ネコが姿を見せなくなり、みんながやっと見つけたのは、この通りでただ一軒ネコが行かなかったはずの、一人暮らしのマレーさんのお宅でした。ネコが主人公のようで、この通り自体が、そしてそこに住む人たちが主人公のような、ほほえましい世界です。（低・中学年から、1400円＋税）

低・中学年向け

『コクルおばあさんとネコ』
（フィリパ・ピアス作、前田美恵子・訳、徳間書店）

これもネコの話。こちらはコクルおばあさんと暮している黒ねこのピーター。コクルおばあさんはロンドンの町の風船売りで、高い高い家の最上階に住んでいます。部屋の天井にはね窓があり、そこから屋根に上がって町を眺めるのが、コクルおばあさんもピーターも大好きでした。ところが、悪天候が続き、生の魚を食べられなくなったピーターは家出をしてしまいます。心配のあまりやせてしまったおばあさんは、風船を持ったまま風に吹き飛ばされて、思いがけない冒険に。『トムは真夜中の庭で』などの作者の、ちょっとユーモラスで味わい深いストーリーです。（低・中学年向き、1300円＋税）

『消えた時間割』
（西村友里・作、大庭賢哉・絵、学研プラス）

真子や明日香の4年生のクラスの池田先生は、毎週金曜日に翌週の詳しい学習予定を載せたプリントを配ります。ところが先週の金曜日、ロッカーの上にあった墨汁が配る前の予定表に垂れてしまって、何人かは黒いシミのついたプリントを受け取ることになりました。真子は、月曜日の持ち物の「絵の具」のところに、明日香は木曜日の「地図」というところに墨汁が垂れたのですが、本当に絵の具や地図を使わないことになったのです。この話を耳にした子たちにも同様のことが起こるのですが、この墨汁は妙法寺の前で拾われたもので、実はこの寺には墨汁に関わる言い伝えがあるのでした。ちょっとした不思議がまるで墨汁のシミが広がるようにじわじわと広がっていくプロセスにリアリティがあり、さまざまなドラマが生まれていきます。（中・高学年向き、1300円＋税）

高学年・中学生向け

『さよなら、おばけ団地』（藤重ヒカル・作、浜野史子・絵、福音館書店）

老朽化や高齢化などの問題に直面している団地も少なくないようですが、この作品の舞台の桜が谷団地も、すでに取り壊しが決まっています。特に「旧番地」と呼ばれる奥側の三十棟は、とっくに無人となっていて、新番地の住人もあまり足を踏み入れることはありません。ここは別名「おばけ団地」とも呼ばれていますが、実はまだにぎわっていた頃からいろいろなうわさがあったのでした。新番地に住む結衣が久しぶりに旧番地に「探検」に行き、不思議な子どもたちと出会う第一話「おくりっこ」、子ども時代をここで送り、小学校の先生として戻ってきた里村先生が、かつての思い出と出会う「黒マントの男」など、5話からなるオムニバス風な構成になっています。時間の記憶が「物語」になっていくプロセスを目の当たりにするようで、この作品は大人にも子どもにも読んでほしいと思いました。（高学年以上向き、1400円＋税）

『わたしの空と五・七・五』（森埜こみち・作、山田和明・絵、講談社）

中学に入学したものの、クラスでなかなか友だちができず、部活の選択にも迷う空良（そら）。下駄箱に入っていたチラシに誘われて文芸部の部室に行ってみると、3年生が二人だけで廃部の危機。先に1年生の小林静香が入部していましたが、空良は踏み切れません。さらに入部者を増やそうと、句会が計画され、空良も無理矢理3点の俳句を作ることになります。近年流行りの「部活もの」なのですが、空良や他の子たちの心の風景と、彼らが作る俳句とが実にマッチしていて、3年生による講評も含めて、俳句を作ったり、読まれたりするドキドキ感がストレートに伝わってきます。テレビの某番組で、芸能人の作る俳句への切れの良い評が話題になっていますが、あえてその中学生版といっても、この作品は許してくれそうです。（1400円＋税）

クツワが文具アイデアを募集／7月31日必着

協賛会社のクツワ（ベルマーク番号55）が、「100年後も愛される文具」のアイデアを募集しています。

今年で7回目。クツワ商品をもとに、事務用品や学童文具、特に子どもの学用品を「進化」させるアイデアを募っています。「斬新で機能やデザインに優れ、付加価値がある」「商品化の可能性がある」を基準に社内で審査し、大賞1点に10万円分の商品券、優秀賞と入賞作品にも図書カードを贈呈します。過去には「転がすえんぴつけずり」「一皮むけて、成長するマグネット筆入」などのアイデアが大賞を受賞。第3回の優秀賞「最後まで使いたくなる鉛筆」は2年前に「駅名えんぴつ」として商品化されました。

7月31日必着。要領と応募用紙はクツワのHPをご覧ください。発表は10月1日。親子や友人などグループでの応募も歓迎。問い合わせは同社サービスセンター（06・6745・5611）へ。

ファミマ「ありがとうの手紙コンテスト2018」

今年で10年目、10月1日締切

協賛会社のファミリーマート（ベルマーク番号23）による「ありがとうの手紙コンテスト」の募集が今年も始まりました。2009年から実施しており、今年で10年目を迎えます。

小学生を対象に、普段なかなか言えない「ありがとう」という感謝の気持ちを、言葉で伝える手紙を書いてもらいます。審査員長はジャーナリストの池上彰さん。作品は一人1点、オリジナルの未発表作品に限ります。10月1日締め切り（消印有効）。全国を7ブロックに分け、低学年・中学年・高学年の3部門で「最優秀作品賞」21人などを選び、図書カードを贈ります。発表は12月中旬。詳しくは同社HPで。問い合わせは0120-611260へ。

「ベルマーク便りコンクール」作品を募集／9月30日締切

第33回ベルマーク便りコンクールの作品を募集します。学校・幼稚園などから、家庭や子どもたち、地域の人たちに向けた、ベルマークの収集や活動への協力を呼びかけるお知らせや新聞、広報紙をお送りください。

【応募方法】特集号や冊子なども含め、過去1年以内（2017年10月1日～2018年9月30日）に製作されたものが対象です。サイズや、カラーか白黒かは問いません。年間の活動状況がわかるように、なるべく多くの作品をお送りください。肖像権や著作権上で問題となる可能性がある内容については審査の対象外となる場合があります。1面題字下にある財団住所の「ベルマーク便りコンクール係」あてにお送りください。締め切りは9月30日（消印有効）。

【賞金と参加賞】優秀賞10点に各3万円と副賞として額入り表彰状、佳作10点と特別賞には各1万円と額入り表彰状を贈呈します。受賞しなかった応募団体にも、参加賞として2000円の図書カードを贈ります。11月に財団ホームページで入賞校を発表します。